

衆議院議員 猪口邦子著「丸暗記は最良の英語上達法」こころの玉手箱④日本経済新聞 2007年10月12日を読む

十代前半をすごしたサンパウロのアメリカンスクールはアジア人禁制だった。そこに通ったのは、父が学校当局に掛け合ってくれたおかげだ。当然、肩に力が入る。「武士の一分」ならぬ「子供の一分」を保たなければならない。英語を死に物狂いで勉強した。

音読、繰り返し、暗記。勉強法はこれに尽きる。単語を覚えるためのノートやカードを何冊もつくり、毎日せつせと読み、書いた。いちど覚えた単語も毎日最初から繰り返す。意味を悟り、綴りはアルファベットをそのまま覚える。アップルは「エイ・ピー・ピー・エル・イー」。この世をあきらめたとあって自ら修練を課した。

使える単語をひとつでも多く増やす。何千も知っていれば、まず本が読める。単語がわかれば文法は後からでも簡単に学べる。次は定型文を丸暗記する。英作文ができるようになる。応用を利かすには頭に収まっている単語を入れ替え、あてはめればいい。

軍縮大使になったときもこのやり方だった。まず条約をほぼ丸暗記する。交渉相手がたとえば「一五条二項は…」などと言いながらファイルを開こうとしたら、すかさず条文を諳んじる。それだけで心理戦で優位に立てた。

いまは議員として海外からお客を迎えることが増えた。それは楽しみだが、英語力が鈍ったと感じることもある。そこで朝の十数分間、自宅へ届くヘラルドトリビューン紙の一面記事の音読をしている。声に出すとわかるけど、日本語と英語では喋るときに使う顔の筋肉が違う。表情や身ぶり手ぶりも異なる。音読は筋力トレーニングでもある。

アメリカンスクールでは英語のシャワーを浴びるような授業の毎日だった。それに立ち向かおうと、自ら編み出した勉強法。いまからでも英語が上手になりたいひとにお勧めだ。論語にも、学ばずして時にこれを習う、亦た説ばしからずや、とある。二カ月間、ほかのことを全部あきらめて続けてみてください。